

令和6年度 ヤングケアラーコーディネーターの取組

中央福祉相談センター

1 取組の概要

(1) 実態調査	◎ヒヤリング調査 ・市町村、教育分野、介護分野、医療・保健分野、 地域・民間支援団体
(2) 周知啓発	◎「ヤングケアラー支援のてびき」 ・配布、研修会等での活用、ホームページ周知
(3) 支援体制の調査	◎アンケートによる市町村支援体制調査 30市町村
(4) 研修講師	◎市町村主催研修 ◎出張講座 ・学校分野、介護分野、民間団体
(5) こども自身の気づき や相談を促す取組	◎高校生を対象にした元当事者による講演会及び相談会実施 ◎コーディネーターによる高校生向け出前授業 ◎「親子のための相談LINE」チラシの周知、配布

2 取組の内容

(1) 実態調査

ヤングケアラーコーディネーターが、市町村、学校、民間支援団体、医療・介護分野の関係機関に直接出向き、ヤングケアラー支援の状況についてヒヤリングによる実態調査を行った。

①令和6年度 ヒヤリング調査実績

市町村：4 学校：2 介護：3 生活福祉：2 医療・保健：3
地域・民間支援団体：4

②ヒヤリング調査における意見及び調査によって、以下のような課題が明らかになった。

市町村

- ・既存の要対協を活用することで関係機関との連携が円滑である。
- ・高校生年齢以降の情報収集の難しさがある。
- ・調査及び支援等のマンパワーが不足している。

教育分野

- ・学校として校内の仕組みを使って心配のある生徒には対応している。
- ・高校の場合には生徒居住地域の関係機関との連携が難しい。
- ・ヤングケアラー支援について学ぶ機会が必要。

介護分野

- ・利用者中心に支援をしてきたため、家族へのアセスメントの視点不足がある。
- ・ヤングケアラー支援について学ぶ機会が必要。

医療分野

- ・患者中心で、今までヤングケアラーの視点が不足していた。
- ・ヤングケアラーへの認知・理解不足。
- ・ヤングケアラー支援について学ぶ機会が必要。

地域・民間支援団体

- ・関係機関とのつながりに団体ごとに差がある。
- ・民間支援団体の関係者が支援の理解と正しい知識を学ぶ機会が必要。

(2) 周知啓発

令和5年度に作成した「ヤングケアラー支援のてびき」の配布、研修会等での活用により周知啓発を行った。

①てびき配布先



市町村（要保護児童対策地域協議会・教育委員会）、児童相談所、県健康福祉（環境）部、県立・私立・国立学校、県要保護児童対策地域協議会構成機関、ヤングケアラー支援検討会議委員

②ヤングケアラーコーディネーターによる研修、出張講座での活用

③県ホームページで周知

（ホームページ掲載内容の抜粋）

「ヤングケアラー支援のてびき」について

 印刷  文字を大きくして印刷 ページ番号：0655107 更新日：2024年9月12日更新

中央福祉相談センターでは、ヤングケアラーについて理解を深め、関係機関や支援者が、支援の流れを知ることにより、多機関で効果的に連携しながら迅速かつ円滑に支援を行うことを目的として「ヤングケアラー支援のてびき」を作成しました。

ヤングケアラーに関する支援や啓発等幅広く御活用ください。

 [ヤングケアラー支援のてびき \[PDFファイル/1.16MB\]](#)

※冊子として利用する場合は上記PDFファイルを印刷してご利用ください。

(3) 支援体制の調査

アンケート形式により各市町村の支援体制について調査した。

①対象 市町村要保護児童対策地域協議会（30ヶ所）

②実施期間 令和6年10月11日から令和6年10月31日

③結果概要

- 市町村のヤングケアラーに関する実態把握の取組が進展しており、支援連携先の着実な増加が図られています。

- ・「ヤングケアラーと思われるこどもの実態を把握している」市町村が増加している。（問1-6）
- ・ヤングケアラーに関する取組内容として「教育委員会等でのヤングケアラーの実態調査・把握」と回答する市町村が増加している。（問2-1）
- ・支援に当たっての連携先（複数回答）の回答総数が増加している。（問3-3）

- ヤングケアラー自身や家族にヤングケアラーの認識が不足していることが、支援上の課題となっています。

- ・ヤングケアラーと思われるこどもはあるが、その実態を把握していない理由として、「家庭内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しい」或いは「ヤングケアラーであるこども自身やその家族が『ヤングケアラー』という問題を認識していない」と回答した市町村が多い。（問1-8）
- ・ヤングケアラーである可能性を確認する上での課題として「家族内のことで問題が表に出にくく、こどもの『ヤングケアラー』としての状況把握が難しい」或いは「ヤングケアラーであるこども自身やその家族が『ヤングケアラー』という問題を認識していない」と回答した市町村が、令和4年度、令和5年度から引き続き高い割合となっている。（問3-1）

(4) 研修講師

ヤングケアラーコーディネーターが研修講師（市町村主催研修・出張講座）を務めることにより、関係機関のヤングケアラーについての理解や支援体制構築の促進を図った。

①令和6年度実績（令和6年12月末現在）

- ・研修講師：12件 参加者：約370人（令和7年1月以降の予定講座：4件）
- ・派遣先：学校等：4 介護：6 市町村：1 民間支援団体：1

②研修前アンケート

研修会で知りたいことを確認して研修内容に活かすため、研修会参加者に事前アンケートを実施した。（回答任意）

問) どのようなことを知りたいか（抜粋）

<教育分野>

- ・学校でやるべき支援の流れを知りたい、学校としてできることを知りたい。
- ・ヤングケアラーとお手伝いの線引き。
- ・ヤングケアラーの実態と具体例を知りたい。

<介護分野>

- ・どこまでがお手伝いの範囲で、どこからがヤングケアラーなのか。
- ・ケアマネに求められている役割を具体的に知りたい。
- ・発見した時にどう判断していったらよいかを相談できる窓口を知りたい。
- ・大学生や若者のヤングケアラーについて、支援者として気づくことができるか不安。

問) 自由意見（抜粋）

<教育分野>

- ・どうすれば学校の負担を減らしながら専門機関と連携が取れるのか。
- ・学校では抱えきれない問題を相談して一緒に解決してもらえるか。
- ・教員としては、生徒のために市町村に相談したが、支援してもらえず仕事が増えただけと感じた。
- ・ヤングケアラーかどうか相談できる窓口が欲しい、知りたい。

<介護分野>

- ・家の手伝いにどこまで介入すべきか悩む。
- ・子どもたちへの接し方やどこにつないだらいいのを知りたい。

(5) こども自身の気づきや相談を促す取組

①高校生を対象にした元当事者による講演会及び相談会

高校生を対象に、元ヤングケアラー当事者から講師として自身の体験を通じた講演を行うことにより、ヤングケアラーや人権について関心と理解を高めることを目的とする講演会を行った。

また、講演会終了後、支援が必要な生徒を支援につなげる契機とするため生徒を対象とした相談会を設定し、教職員に学校における継続的な支援を依頼した。

ア 令和6年度実績

- ・県立高等学校 2校
- ・総生徒数 604名

イ 講演会後のアンケート結果（参考）

問) ヤングケアラーについて聞いた事がありましたか

(n = 604)

聞いた事があり内容も知っていた	26.2%
聞いた事はあるが内容を知らなかった	40.6%
聞いた事がなかった	33.3%

問) 講演を聞いたヤングケアラーの理解が深まりましたか

(n = 604)

とても深まった	66.7%
やや深まった	32.6%
あまり深まらなかった	0.7%
わからない	0.0%

問) 感想（抜粋）

- ・今日の講演を聞いて初めてヤングケアラーのことを深く知ることができたので良かったです。
- ・小学校や中学校からケアをしている人がいることを初めて知った。やらざるを得ない状況で精神的なケアが必要ではないか。
- ・親の世話をするために自分の時間を潰すこどもが多くいることに驚いた。
- ・友達の話聞いてあげようと思った。
- ・子どもの権利をおびやかされることは怖いと思った。
- ・信頼できる大人を見つけておくことは大事だ。
- ・人に相談することの、難しさがわかった。
- ・1人で抱えこまず、同じような経験がある仲間とつながることは大切だ。

②コーディネーターによる高校生向け出前授業

ヤングケアラーコーディネーターが講師を務めて、県立高等学校においてヤングケアラーに関する出前授業を行った。

令和6年度実績

- ・県立高等学校：1校
- ・生徒数：164人

3 ヤングケアラーコーディネーターの取組を通して 明らかになった課題と今後の支援に向けて

●学校の役割の大きさ

課題

- ・市町村が実態把握をするためには、こどもにとって最も身近な学校現場の協力が必要不可欠である。
- ・ヤングケアラーに関する実態調査（注）は、こども自身からのSOS発信のきっかけであると捉えることも大切である。

今後の支援に向けて

- ◎学校職員がこどもの発信に気づくことができるよう、ヤングケアラー支援に関する研修の機会を増やし、理解を深める取組みを継続する。

●こどもが自身の権利に気づくきっかけづくりの大切さ

課題

- ・こども自身が、ヤングケアラーについて学びの機会を得ることが重要である。

今後の支援に向けて

- ◎元当事者による講演会、ヤングケアラーコーディネーターによる出張講座などの活用を積極的に検討してもらうよう教育関係機関に働きかけていく。

●支援者に向けた研修会を通して理解を深める必要性

課題

- ・幅広い関係機関の支援者に、ヤングケアラー支援への理解を深め、気づきの目を育てていく必要がある。

今後の支援に向けて

- ◎ヤングケアラー支援のてびきの活用促進に向けた周知・啓発を継続していく。
- ◎民間支援団体をはじめ地域住民への周知啓発につながる研修会の機会を増やしていく。

●関係機関との連携と18歳以降の受け皿

課題

- ・医療分野へのヒヤリング調査においてヤングケアラー支援に関する認識が不足している状況があることから、教育、福祉に加え医療との連携による包括的な支援が必要不可欠である。
- ・18歳以降の切れ目ない支援も視野に入れた支援者側の気づきと連携が重要である。

今後の支援に向けて

- ◎関係機関の連携強化、18歳以降の切れ目ない支援に向け、各市町村の実情に応じた相談支援体制の整備推進に向けた助言等継続していく。

※注 ヤングケアラーに関する実態調査

ヤングケアラーの可能性のある児童生徒の気づきを促し、速やかに必要な支援につなげることを目的とし、令和4年度から各学校の小学校4年～6年生、中学生及び高校生全員を対象に日常生活についてのアンケートを実施しています。